

オール讀物

5

All Yomimono

直木賞受賞第一作
青山文平
「機織る武家」

生誕100周年

「若冲」の魅力 澤田瞳子

伊藤理佐×ジェーン・スー

「おんながうまく歳をとるために」

創刊八十五周年記念号

「御宿かわせみ」300話へ

連載四十三年の歩み

平岩弓枝「東吾について考えていること」

最新作「二人女房」

高島礼子 中村橋之助 インタビュー

新連載

石田衣良 朱川湊人

北村薫 西村京太郎

女性作家たちの講演

高村薫 村山由佳 姫野カオルコ

桜木紫乃 柚木麻子 曾野綾子



若冲

かもしれません。

ちなみにその食探訪の番組では、米蔵が並んだという大川端を五代目尾上菊之助丈が鰻丼を詰めた岡持を背負って走るというシーンも盛り込まれ、梨園の御曹司の手代姿に衆目が集まる中で共演者としてはハラハラしつつ、当のご本人はなかなかにご満悦の様子でした。専門家の言うところでは、大川を頻繁に行き来する舟で運んだ米を岸に荷揚げする時にはどうしても幾らかは大川にこぼれ落ちてしまい、川底でそのおこぼれの米を食べた鰻がまるまると肥えて脂が乗ったものだから、江戸前の鰻は旨かったとか。なるほど……神林東吾さんも敵源三郎さんも、そんな旨い鰻を食べたんだろうか、るいさんは楚々としつつも花が咲いたような艶やかさで、熱い番茶をそつと出したんだらうか……なんて、勝手な想像がふくらみます。

あらためて「御宿かわせみ」の魅力を文字にするなど烏滯がましくも恐れ多いほど、長きにわたり愛される連載小説です。一九七三年にスタートして、連載誌が休刊となったために出版社を変えて三十年以上。連載が始まった当初は六歳だったわたくしが四十八歳となった今も、二〇〇七年に始まった待望の新シリーズ、主人公の子ども世代を新たに中心とした現連載を心待ちにし、新刊を待つ間にも飽くことなくこれまでの文庫を手にとって読み返しているわけですから、わたくしという小さな一サンプルをみても、人の半生をほぼすつぱりと魅了し続けていることになりました。

一話完結の推理・捕り物帖、江戸の隅々で巻き起こる民事

るのに、つい三杯目をお吉によそってもらうことになる。服りたての白胡麻を飯の上にふりかけながら、嘉助は柔和にみえる眼の奥を光らせた。「恋ふたたび」「幽霊殺し」収録）今は「かわせみ」の老番頭、昔は八丁堀の鬼同心の下で働いた腕ぎきの捕方の嘉助に、同じく今は「かわせみ」の女中頭となつたお吉が台所で朝飯を出す場面ですが、なんとも、おいしそう……。炊きたてのご飯の湯気や、大根の味噌汁や紫蘇の葉の香りまで漂ってきそう……。うん。

人は（わたくしは特に食についてなのですが）香りや湿めり気や湯気、着物の肌触りなど五感を通じて神経に直に伝わると、論やら理やら頭で考える部分を端折つたかのようにぐつと惹きつけられてしまう面があるように感じますが、まさにそんな共感から、物語のなかであるはずの「かわせみ」という宿屋の暖簾をくぐり、藤の間なのか梅の間なのか、心地よく長逗留しながら江戸の時間を共に過ごしているような心持の読者は多いのではないのでしょうか。

そして長くなりましたが、最後に敬愛をこめて書き添えたのは、清々しくも慎ましく暮らす主人公たちの情にあふれた立ち居振る舞いに読み手が魅了されていることは言わずもがなですが、なかでも愛すべき彼等の誰しもが、何かしら耐えながら生きている姿が物語に通底する調べとなつて、静かな美しさを醸している点です。半可な小説などで、途中にたぐさんの疑問符をちりばめながら最後に夢落ち（全ては夢だったというところで幕切れする手法）などという場合には、どこに憤怒を持っていかうかと内心腹立たしく思ったりもする

事件や刑事事件を毎回鮮やかにひも解いていく心地よさを横糸に、八丁堀の与力・同心やその身内のレギュラーの登場人物の織り成す日常の営みが江戸の四季を背景に少しずつ時代を下つていく縦糸と絶妙なバランスで絡まって、まるでそこで小さな渦を巻いたり淀みをつくつたりしながらも、ゆつたりと海へと注いでいく大川の流れそのもののような悠々と魅力的な物語。

いや、ただ大川の流れのようなと記すと雄大な時代小説という印象のみ強く感じられるかもしませんが、わたくしにとつての「御宿かわせみ」の魅力は、その筆使いと目線の細やかさに最もある気がしています。

江戸末期から始まり、新シリーズでは維新後の明治期へと続く日本が最も大きく国としての変容を遂げた時代のうねりと、一話ごとにしつかりと練られた推理展開が、読者を離さない吸引力となつているのは然ることながら、そんな行間のところどころにさり気なく添えられる日常生活の温度や湿度のような情景が、読んでいるはずのこちら側をもふつと物語の中へと招き入れてくれる柔らかい錯覚を覚えます。このまま拙い文の運びで、「かわせみ」への想いの丈を綴つてもなかなか伝わりにくいものかと案じるので、思い切つて抜粋引用しますと……。

「大根の千六本の味噌汁はもう何度かあたため直したので味噌の香がとんでしまつていたが、梅漬けの紫蘇の葉を細かく刻んで炊きたての飯にまぶした「かわせみ」自慢の朝飯は嘉助の大好物で、年をとつて来てからは腹八分目を心掛けている。一読者のわたくしとしては、「かわせみ」の登場人物への作者の優しい目線、理不尽が重なる世の中でも必ずどこかで見守つてくれると感じる筆使い、それでも降り掛かってくる試練をどう背負い生きていくかという主人公たちの姿勢に、読みながら励まされ、教えられることがしばしばあります。喜怒哀楽の喜と楽だけで済めばよい世の中、どうしても訪れる試練にどんなふうに向き合うかを器と呼び、続いて押し寄せる絶え間のない哀しみにどう耐えながら、それでも凍と生きるかを品と呼ぶのではないかと、明るく丁寧に日々を送る「かわせみ」の人々は言葉にせずとも教えてくれているような。

だから、目や耳を覆いたくなるような事柄が日々起こる今の浮き世でも、本を開けば「御宿かわせみ」の人々が暮らし、泣き笑いし、事件と聞けばは駆け出していくこの物語世界に、小さな灯りのような安堵と幸せを感じて、これからも「かわせみ」の人々の活躍を心底、待ち続けてしまふのです。



「新・御宿かわせみ」 海外編への期待

山内昌之

東京大学名誉教授

「新・御宿かわせみ」の若い主人公たちにも随分と慣れてきた人も多いだろう。（若きかわせみの人びと）は、維新から

開化の時代をたくましくも爽やかに生きている。軍船の遭難で帰らぬ人となった神林東吾と、るいの間に生まれた千春も、すでに清野凛太郎と結ばれた。

江戸から東京への変わりは、東吾や同心・敵源三郎が生きていた時代なら想像もできないほどだ。公家という新人種がすまして、るいはじめへかわせみの人びと」の生活に闖入してくるのを読んで思わず笑いこぼれた。「殿様は色好み」の篇である。

或る日、高市新之助と名乗る若者が、かわせみに宿を求めて、竹の間に逗留することになった。金子もふんだんにあり、生まれつきの気品も尋常ではないのだが、るいはもとより、女中頭のお吉や若い女中にも親しげに声をかけるなど振舞いが一風変わった。近場でじつと女たちの顔を見つめるものだから皆が気味悪がる。宿帳には京都の公家ゆかりの者と知れる住所や名前を記しているの身元はさほどおかしくない。それでも、るいが「恥知らずの女好き」だと唾棄するほど嫌うのだから、余程の変人なのだろう。お吉まで口説かれたと自慢めいた告げ口をすることがおかし。さすがのるいも、自分は毅然として身を固く持っているので言い寄られないと、妙な言い訳をする。

しかし、新之助が具体的にどういう悪さをしたのかというと、どうも一同はつきり説明できない。お吉が言うには、新之助はこう言ったというのだ。自分は幼いころに母と死別したので、あなたのような年頃の女性から優しくしてもらおうと涙が出るほど嬉しい、と。江戸の武家や町衆の道徳観からすれば、

これははしたないことだ。まるで女性を口説く手練手管ではないか、と気色ばむ。東吾の妻子でいまや英国医学を修めた麻太郎も、何と不潔な奴だといきまぐ女たちを有めるどころか、「まさか」と言いながらも臍を決するのは滑稽なほどだ。

岡場所に行くわけでもなく、酒をたしなまない新之助をほとんど何の根拠もなく誹謗するへかわせみの人びと」の粗忽さ加減も相当なものだ。東吾が生きていれば、聡明ながら勝負なるいやり半畳を入れ、思い込みと想像力の豊かなお吉に皮肉の一つでも言うところだろう。

かわせみの面々は新之助の言葉を素直に受け止めればよかったのに、色々を回して半ば敬遠し半ば猜疑心で接するものだから、どうにも「殿様は色好み」の作品だけでは埒が明かない。彼の正体が分かるのは、麻太郎が再び医学知識を深めるために世界留学の旅に出る横浜の波止場でのことだ。

女医志望で英国留学に立つ一条結子なる女性の見送りに来たのが新之助なのだ。公家も公家、華族も華族、この「女好き」は、五撰家に生まれた一条道明なる貴種だったのである。同じ船に乗る医者麻太郎も、築地居留地でのひよんな出来事で結子を見知っており、これが最初の出会いではない。町奉行与力の養子麻太郎と五撰家の結子との間に、長い船旅でどのような会話が交わされたのか楽しみだ。「お伊勢まいり」で帰国した麻太郎だが二人は無事結ばれる機会に恵まれるのだろうか。

洋行中の二人の様子を描いた「新・御宿かわせみ」海外編ともいべき作品も読んでみたいものだ。

魔女の封印

「地獄島」での壮絶な経験から得た特殊能力！男をひと目で見抜く！この能力を生かし、東京で女ひとり闇のコンサルタントとして、裏社会を生き抜く女性、水原の戦い——第3弾！

週刊文春連載時から大好評の「魔女」シリーズ
一瞬で人の生命を奪い、日本の安全保障をも脅かす。
1億人に1人の存在とは？



●定価(本体)1850円(税)

大沢在昌

好評既刊

●定価(本体)760円(税)
文庫文庫



シリーズ第2弾

日中韓を舞台に、巨大な組織に立ち向かう——！

●定価(本体)630円(税)
文庫文庫



シリーズ第1弾

「地獄」を見た女は、男のすべてを見抜く！